

社会を読み解く文法であり方程式である経済学。 そのおもしろさを伝えたい。

分からなかった経験が、 分かりやすい教え方へとつながる

経済学をなぜ学ぶのでしょうか？私の答えは簡単です。まず、おもしろいから。そして、社会の動きをちゃんと理解するのに不可欠な知識だからです。そのおもしろさを伝えていくのが私の役割だと考えています。

「大学の授業ってつまらないよ。そもそも何言っているのかよく分からないし。」一足先に大学に入った友人の言葉でした。自分も入学して授業に出てみて、「全くそのとおりだ」と思いましたね。講義ノートをただ棒読みするだけの先生、質問に行くと「こんなくだらないことを質問するな」というような態度をとる先生、学生が理解できようができまいが自分勝手なペースで講義を進める先生などいて、多くの授業に失望しました。教科書を読んでみても、文章が「あまりにも高尚」すぎて10分も読むと居眠りです。自然と教室からは足が遠のき、部活（体育会バレーボール部）中心の生活になっていきました。「城太に会いたければ、体育館か雀荘に行け」と友人連中は言っていたようです。一時期、経済学がさっぱり分からず、完全に興味を失っていました。だけど、「このままではいかん」と奮起して、根気強く勉強してみると、奥が深く、結構おもしろいということに気が付いたのです。

経済学がさっぱり分からないという時期を経験していますから、分からない人の気持ちが分かります。どこが分からなくて、どうすれば理解できるかがイメージできるのです。また、私が失望した講義が、反面教師となって今ごろ役に立っています。経済学について白紙の状態の学生に、経済の面白さを知り興味を深めてもらうには、私こそ適任といえるでしょう（笑）。

なお、社会の動きをちゃんと理解するのに不可欠な知識だというのは、経済学がいわば社会の文法の一つといえるからです。言語で考えてみれば、文法を知らなくともしゃべることはできますが、キチンとした文章を書いたり、筋の通った話をしたりするには文法の素養が欠かせません。

たとえば、消費税が5%から10%に上がるとします。モノが売れにくくなるということぐらいいは経済学を知らなくとも分かります。しかし、どういう仕組みで、それがどう作用して、社会にどんな影

響を与えるかをきちっと理解するには、経済学が必要になります。つまり、社会における経済の動きを知るためには、その文法（経済学）を身につけて、それを分析する方程式を知る必要があるのです。

身近な出来事から 経済の見方・考え方を伝える

学部の授業では、経済学のおもしろさを知り関心を深めてもらうために、さまざまな具体例を交えて話をします。

たとえば、経済学での重要な考え方の一つに、「機会費用」というものがあります。何かをするには、何かを諦めなければならない、それを費用としてカウントするということです。この概念を説明するときに私が用いるのが、メジャーリーガー松坂大輔投手の西武ライ



オンズ入団時のエピソードです。彼はもともと横浜ベイスターズ入団を希望していました。横浜に指名されなければ、ノンプロに行くと言っていました。しかし、ドラフトでクジを引き当てたのは西武ライオンズです。西武ライオンズは入団交渉で、プロでなくノンプロで2年間過ごすことによる大幅な収入面のロスや技術面でのブラッシュアップ機会の喪失、すなわち多額の「機会費用」が生じることを

恐らく強調したと思います。これによって、松坂に入団を決意させることができたのではないのでしょうか。

私の専門は国際経済学ですが、貿易の利益を説明する際に、『一橋論叢』（1993年4月号、<http://www.econ.hit-u.ac.jp/~jota/syukuzu.html>）でも紹介した次のような自分の小学生時代の経験を語ったりもします。

小学校では土曜日には給食がなく弁当でした。私の弁当は梅干しのおにぎり二つとおかずでしたが、このおにぎりが人気で毎回級友のおいしそうなおかずと交換したものです。おにぎり一つをおかずと交換してしまうとおなかがすいてしまいます。そこで母に、おかずを減らしていいからおにぎりを三つにしてほしいと頼みました。すると、おにぎりの一つをこれまでどおりおかずと交換し、もう一つを違う具の入ったおにぎりとの交換ができるようになったのです。

こんな誰にでもありそうな何気ない経験に、貿易による利益の本質が見えるのです。貿易による利益には、まず「交換による利益」と「特化による利益」があります。交換による利益とは、それぞれ

にとって希少価値の低い物を希少価値の高い物に交換することによって生ずる利益です。私にとって自分のおにぎりは希少価値が低かったですが、級友のおかずは希少価値が高かったのです。級友にとっては、逆になります。一方の特化による利益は、輸出品の生産を増やして輸入品を減らす結果によって所得水準が高まることによって得られます。私がおにぎりを増やしておかずを減らしたことがこれに当たります。また、貿易によって商品のバラエティが増えることでも消費者の利益が高まります。梅干しのおにぎりや鮭のおにぎりの交換によって、2種類のおにぎりを食べられるようになり、私の満足感は高まったのです。

こうした例を使って経済学の見方や考え方を示すことで、学生たちが自分の頭で経済現象を整理し、分析できるようになってもらいたいと考えているのです。

サービスの自由化は 国際貿易の必然的な流れ

国際経済学では、ヒト、モノ、カネ、サービスの国境を超えた動きを扱っています。それらをどのように自由化していったらよいのかというのがポイントになります。国際経済学の視点は、変わりつつあります。今まではモノ、特に工業製品の貿易自由化が進められてきました。しかし、次第に、サービスやヒトの移動へと次元が広がってきたのです。

モノの貿易の自由化というのは分かりやすいですが、サービス貿易の自由化というのは見えなだけに分かりづらいものです。そこで、ここでも具体例を挙げます。皆さんがハワイにユナイテッド航空で行ってヒルトンホテルに泊まったとしたら、日本はアメリカから「輸送」と「宿泊」というサービスを輸入したことになるんだよ。

サービス貿易自由化の本格的な協議が始まったのはウルグアイ・ラウンドです。まだ十数年の歴史しかありませんから、課題も多く残っています。それは、サービスやヒトの移動については、各国の国内政治や制度と密接に関連してくるだけに経済だけでは割り切れず、なかなか自由化が難しい面があるからです。日本でも、フィリピンやインドネシアから看護師が入ってきたら現場でさまざまな摩擦が生じるというような点が政治問題化しています。経済学だけの方程式ではなく、政治の方程式や人間行動学までからんでくるのです。

アイルランドに住んでいる知り合いの大学教授は、ハンガリーへ歯の治療に行くツアーに参加しようかと考えています。これなどは、観光付きで医療サービスを輸入していることになります。こうしたケースは、今後ますます増えてくるでしょう。グローバル化する社会にあって、サービスやヒトの国際化は避けて通ることができない課題なのです。

自分の考え方を表現する ツールとしての英語力が足りない

グローバル化が進む社会にあっては、大学教育も否応なしにそれを意識することが求められます。具体的には、グローバルな視点を身につけ、グローバルに活躍できる実践力を発揮できる学生を育成することです。

学部の1年次は高校から大学への転換期にあたりますから、経済学のおもしろさに目覚め関心を深めてもらうとともに、経済学的な考え方を早く身につけてもらおうと思っています。だからこそ、分かりやすい事例や現実に即したテーマをふんだんに盛り込んだ授業を行っているのです。

大学3年生以上を対象とした授業は英語で行っています。日本の大学教育のレベルが国際的に評価されていない原因の一つが英語の問題にあります。英語を聞き、英語で考え、英語で主張することは、グローバル社会では重要なことです。しかし、学生の多くは、英語を読むことはできても、英語を武器にしてディスカッションすることはできません。自分自身も留学するまではそうでした。そこで、賛同してくれる先生とともに英語で授業を行うようにしたのです。

ゼミでも英語でのディスカッションを多少取り入れていますが、実は、その目的は自分がいかに英語ができないかを自覚してもらうことにあります。たとえば、時事問題を英語で報告するようと言えば、ある程度の報告をするのですが、質問を浴びせると、多くの学生は、とたんにしどろもどろになって満足に答えられません。そのような状況を知って発奮してもらいたいのです。

いまや中国や韓国でもトップクラスの学生は当たり前のように英語で議論をしています。このままでは、日本の学生は世界の中で埋没してしまいます。是非グローバルな感覚を身につけて、井の中からグローバルな世界に飛び出して活躍して欲しいですね。(談)



経済学研究科教授

石川城太

Jota Ishikawa

1983年一橋大学経済学部卒業、1985年一橋大学大学院経済学研究科修士課程修了後、同研究科博士後期課程入学、1986年ウェスタン・オンタリオ大学大学院経済学研究科博士課程入学、1990年同修了〔経済学博士 (Ph. D.)〕。ウェスタン・オンタリオ大学経済学部ポスト・ドクトラル・フェロー、1991年一橋大学経済学部専任講師、1994年同学部助教授。1994年4月～6月コロラド大学ボルダー校経済学部客員研究員。1994年7月～1996年3月ブリティッシュ・コロンビア大学商学部客員研究員。1998年一橋大学大学院経済学研究科助教授、2001年同研究科教授。2006年4月～6月ハワイ大学マノア校経済学部客員教授。2006年10月～2007年3月ニュー・サウス・ウェールズ大学経済学部客員教授。